

氏 名：藤 井 美穂子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 5 2 号

学位授与年月日：平成 2 5 年 3 月 1 9 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：生殖補助医療によって双胎妊娠した女性が母親となっていくプロセス—不妊治療期から出産後 6 か月までに焦点を当てて—

Processes of Becoming Mothers of Women Pregnant with Twins  
by Assisted Reproductive Technology:

From Their Infertility Treatment to Pregnancy to the Sixth  
Month After Delivery

論文審査委員：主査 筒 井 真優美

副査 谷 津 裕 子（正研究指導教員）

副査 武 井 麻 子（副研究指導教員）

副査 高 田 早 苗

副査 守 田 美奈子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究の背景】

2002 年の調査によると、日本では双胎妊娠の 45%が不妊治療による妊娠であり、中でも生殖補助医療（Assisted Reproductive Technology：以下 ART）による多胎妊娠は自然な発生頻度の 10～20 倍と高率であることが明らかにされている。ART によって双胎妊娠し、出産し、育児する女性たちは、その過程でどのような体験をし、双子の母親となっていくのだろうか。先行研究からは、ART が女性にもたらす身体的・精神的・経済的負担の大きさや、双胎妊娠・分娩の身体的リスクの大きさ、双子の育児の困難さに関する知見を多数見つけることができるが、ART によって双胎妊娠した女性が不妊治療期から育児期にかけて母親となっていくプロセスを縦断的に調べたものはない。ART によって双胎妊娠した女性が母親となっていくプロセスを、不妊治療期から出産後 6 か月までの時期に焦点を当てて本研究を実施し、ART によって双胎妊娠した女性の援助を要するニーズを把握して、具体的支援に繋げることが必要だと考えた。

### 【研究目的】

生殖補助医療によって双胎妊娠した女性が不妊治療期から出産後 6 か月までに母親となっていくプロセスを明らかにすること。

### 【研究方法】

不妊治療期を経て妊娠した女性が双子の母親となっていく過程という、社会的文化的な影響を受けやすく個別性が強く反映される体験に焦点を当てる方法としてライフストーリー法を用いた。研究参加者は、ART で双胎妊婦となり妊娠後期に胎児に先天性疾患や合併症が見られず、今後の

妊娠・出産経過が順調であると推測でき、出産後 6 か月までの研究参加協力を得られた妊婦 4 名であった。データ収集は、半構成的面接を一人ひとりに 5 時点（①産科外来通院中、②出産後の産褥入院中、③子どもの 1 か月健診時頃、④子どもの 3 か月健診時頃、⑤子どもの 5～6 か月健診時頃）で縦断的に実施した。また、研究参加者が双子の母親になっていくプロセスに接近するために、面接に加えて育児場面の参加観察を行った。データ分析は、4 つの段階を経て実施した（第 1 段階：逐語録の精読、第 2 段階：各時期の出来事の継起と流れの把握、第 3 段階：通時的な出来事の契機と流れの把握、第 4 段階：個々の研究参加者のライフストーリーの導出）。Lincoln & Guba (1985) の自然主義的研究における真実性 (Trustworthiness) の 4 つの規準に則り、データ分析結果の妥当性を確保した。

#### 【倫理的配慮】

日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会 (No. 2012-30) と研究実施施設の研究倫理審査会 (No. 2012-11) の承認を受け、研究活動を開始した。看護部および産科外来・病棟の助産師長に研究の趣旨と概要を文書と口頭で説明した。研究参加者の条件に合う妊婦を助産師長及びスタッフに紹介してもらい、研究参加候補者に対して研究者が研究参加を依頼した。研究参加者は双子の育児をする母親であり、特に出産後 1 か月、3 か月頃という子育てが大変な時期には、短時間で有効的な面接を実施するようにした。また、出産後 6 か月は乳児の活動性が増す時期であるため、研究参加者の同意があった際は看護師免許をもつ面接援助者を同行させ、子どもの事故防止に十分に留意しながら面接を行った。さらに調査期間が長期にわたったため、面接する 5 時点毎に研究参加の同意を確認し直した。

#### 【結果】

##### 1) 研究参加者の概要

研究参加者は、初産婦 3 名と ART による出産 2 度目の経産婦 1 名の計 4 名であった。ART を含む不妊治療期間は初産婦が 3～4 年、経産婦は 7 か月であり、分娩週数は 37～39 週、子どもの体重は 1,900～3,300 g (平均 2,560 g) であった。

##### 2) 不妊治療によって双子を妊娠し出産した女性のライフストーリー

###### (1) 子どもをもつことで夫と家族になる望みを叶えた A さんのライフストーリー

パートナーの希望により入籍前に不妊治療を開始した A さんは、双胎妊娠が判明した時に「(育児) 不安からくるショック」を受けたが、パートナーや実母の喜ぶ反応により双胎妊娠を肯定的に捉えるようになった。妊娠期は自分や子どもが亡くなるという「最悪なケース」に意識を向けていた。出産直後に子どもの生命力を体感した A さんは、退院後 2 児への授乳で疲労し夫と喧嘩する生活を嫌悪する時期もあったが、双子の育児の楽しさを感じるようになると自分にとって双胎妊娠がベストであり、五体満足な子どもを出産したことを「ゴール達成できた」と意味づけて現状に満足した。

###### (2) 子どものために強い母親になろうとする B さんのライフストーリー

B さんは経産婦であり、妊娠確率の高い治療を勧める医師の気持ちを汲み、体外受精卵だけを用いたい自分の思いを押し殺して、現在 3 歳の長子を妊娠した時に凍結保存した受精卵を用いて今回の双胎妊娠に至った。出産後、第 1 子が低血糖となり GCU に入院する出来事が引き金となり、医療者の意見におもねる意思の弱い自分を反省し、母親は子どものために強くあるべきと考えるようになった。出産後 6 か月、長子の時の不妊治療期まで遡って ART に抵抗があったことを語り

つつ、不妊治療によって3人の母親となった現状の幸せを表出した。

### (3) 子どもを失った過去の苦しみから立ち直ろうとするCさんのライフストーリー

初めての妊娠で子宮外妊娠を体験したCさんは、双胎を妊娠した後も妊娠を喜ぶ気持ちを抑制して子どものための準備も最低限にしていたが、妊娠後期の管理入院中に助産師の支援によって胎児と向き合うことができた。出産後6か月のCさんは、子宮外妊娠で子どもを亡くした辛い体験を想起した。辛い過去の物語は子どものために生きる現在の幸せを気づかせ、Cさんの辛かった過去の語りは次第に現在の幸せの語りへと編み直されていた。一方で、見知らぬ人が双子を忌避したり不妊治療を連想したりする言動を聞いたことで、不妊治療中に感じていた自分に対する不全感を思い出していた。

### (4) 母親となったことをなかなか実感できないDさんのライフストーリー

Dさんは不妊治療中に流産を2度経験し、双胎妊娠後も妊娠継続への強い不安があった。妊娠満期になっても胎児を「子宮筋腫の発達したような感覚」と捉え、母親となる実感がなく、母親の役割やイメージについて語るができなかった。出産後も他の女性が自然に子どもと接するような態度を取れないことに気づき、自分に母性が足りていないと感じていたが、子どもの世話や授乳を通して徐々に自分が母親であるという意識をもつようになった。出産後6か月のDさんは、妊娠中は子どもに「思い入れない」ように気持ちを抑制してきたが、妊娠中から子どもと胎動を通してコミュニケーションをとり楽しかったことや、不妊治療中に流産した受精卵を双子のきょうだいと無意識に捉えていたことを吐露し、不妊治療中から今までに色々と経験できて「良かった」と語りを締めくくった。

## 【考察】

### 1) 母親となることの不安と否認

研究参加者は、妊娠期に様々な不安を抱えながらあえて緊張状況に身をおき、胎内で育まれつつある子どもを想像することを控え、自分が母親となるという事態を否認していた。これは、不妊治療期に何度も母親となる期待を裏切られた体験が妊娠期に再来することを回避する手立てであると考えられた。

### 2) 母親となった後によみがえる外傷体験

研究参加者は、子どもが元気に出生したことで不安から解放され、出産後6か月の間に子どもとの交流を通して妊娠期に否認していた子どもとの関係を修復し、母親となったことを実感していた。双子の子育てが落ち着き始めると、不妊治療中に味わった自尊心の低下や失った胎児への思いを語ることで過去を再構成し、辛かった体験から離れて母親としての人生を歩もうとしたと推察された。

### 3) 払拭できない不全感

双子を連れ外出する際に感じた不妊治療を忌避する他者の視線が、研究参加者のセルフステイグマを刺激し、母親となった自覚を揺さぶり母親としてのアイデンティティ形成を阻んでいた。ARTによって双胎妊娠した女性が母親となっていくプロセスは、不妊治療を始めた時から継続する再帰的な物語であった。不妊治療施設と出産施設の連携を図り、不妊治療期から育児期までの継続的な視点をもった支援が必要であると考えられた。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、ART によって双胎妊娠した女性が母親となっていくプロセスを、研究参加者 4 名のライフストーリーを通して明らかにした研究である。ART 後の双胎妊娠は近年増加傾向であり、ハイリスク群という文脈で医学的関心が寄せられているが、看護学分野では先行研究がほとんどなく、オリジナリティの高いテーマであるといえる。加えて、申請者が妊娠後期から出産後 6 カ月までの女性に寄り添う形でインタビューと参加観察を実施し、女性が母親となっていくプロセスをライフストーリーとしてつぶさに記述・分析したことも、看護研究に相応しいアプローチとして評価できる。

ART によって双胎妊娠した女性の語りには、複雑で個別性に富む経験が浮き彫りにされていた。特に、不妊治療に伴う辛い体験を通して根付いた女性としての不全感や子どもへの罪悪感、不妊治療に対するセルフスティグマが、双子を妊娠し出産した後も女性たちの母親としてのアイデンティティを揺るがしていることを見出せた点は意義がある。また、それが母親としての自己像の獲得に深刻な葛藤を引き起こしていることを見出し、この事象に対する看護的介入の必要性を明確化したことは高く評価できる。本研究を通して先端医療技術が人々の経験にもたらす功罪の一端が示されたことは倫理的観点からも興味深く、今後研究の発展が期待される。

博士学位論文審査専門委員会では、申請者に対して質疑応答を行い、審査の結果、本論文を学位規程第 3 条により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。